昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十六年十一月十五日発行（毎月一回十五日発行）
（通第二七〇号）

慈光

第二十三巻　第十一号

目次

懺悔録（三）……近角常観……(1)
……信を得たる人の実例
我聞如是……池山栄吉……(6)
晩年の祖師聖人……福島政雄……(11)
念仏詩抄……木村無相……(14)
師弟一味（続）……花田正夫……(17)

懺悔録（三）

近角常観

第四章　信仰を得たる人の実例

この章において私の信仰の有様を聞いて、同じ信仰を得て、世の中を楽しく日送りしている人が、少くないが、その中で著しい例を一つ申しましょう。

一昨々年の暮、彼の教科書事件が持ちあがった時に、某君は山陽道を旅行中であったが、汽車の中で何気なしに新聞を見ると「其人が縛につく」云々の記事がのせてあった

そこで自分の身の上にも、はからず疑いの雲がかかって自分を探しているに相違ないと思ったから、すぐに検事へ電報をもって「当地の警察署へ出ようか、但しは東京の方へ出ましょうか」と問い合せた。ところが東京の方へ出よとの命令であったから、早々警視庁へ出頭したら、すぐさま鍛冶橋の監獄へ送られた。当時この君の眼中、世界は道理で行けるものであると思っていたので、自分は内に省みてやましいところがない、頗る潔白である、無罪となるは勿論である、と期して居った。

しかるに他の人は段々有罪の宣告を受ける。この君自身も、多分は有罪になろうという形勢である。しかしてその実は少しも有罪となるべき事実は無かっのである。此君は、法理の上から色々と考えて見たが、何分にも裁判官が一方の証言を信じた以上は、容易にそれを打ち消すことが出来ぬ。友人から種々と法律書を差入れてくれたけれども、それらは少しも用をなさぬ。是非なく無念の涙をのんで、無実の罪におちねばならぬことから、心配でたまらぬ

そのうえ妻子を任地に置いてあったが、こんな場合には唯心配させるばかり、又自分のためには苦痛を増すのみであった。実にむごたらしいなさけないことに立ち至った。そこで此君も、すこぶる人間界の浅間しく味気ないことを悟ることになった。その上に、未決監では、本来地位身分のある人は、それ相応に待遇が違う筈であるのに、いよいよ入監して見ると一向そんなわけでなく、自分も賭博や強

盗の犯人と同じ取りあつかいである。もとより待遇のよいのを望むわけでもないが、さりとてなさけないことである

こうなって見ると、従来の学問も官位も、朋友妻子の親切も、一つも我身を慰むるに足るものとてはなく、唯うつうつおうおうとして、殆んど昼夜の区別がない。ここに至って、国家の法律は、たとえば大磐石の如く、個人がこれに向っては、手をもって大磐石を叩くようなもので、如何とも仕様のないものである。絶体絶命、実に自分は不運であると覚悟した。かく覚悟はしたものの、それのみでは心の中が益々不平でたまらぬ、とても安心が出来ぬ。思えば思うほど益々不安におちいる。のちには立っても居てもたまらない、唯悶え苦しむばかりであった。

私はこの時、教科書事件のために入監している人達に、私の『信仰之余瀝（しんこうのよれき）』百五十部を差し入れて進呈した。此君が煩悶苦痛の最中へそれが届いた。そこでそれを初めから読んで下さった。前にも申す通り『信仰之余瀝』の第一章は、私が苦しんだ当時、忽然（こつねん）仏陀の慈悲を感じて、初めてその苦しみの中から解脱することになった経験を、そのまま写したので、その大要は

「人は如何に苦しむとも、如何なる境遇にあるとも、それにはかまわずに、只満身同情の涙をもって、我身をながめ、我心の中のすみずみまでも能く知りぬいて、しかも我等のとがやあやまちを問いたまわず、ひたすら憐れみ救うて下さる真実の朋友は、唯仏陀ばかりである。我等は、この仏陀の慈悲にすがり救いにあずかるより外、安心の道はない」

というのであります。此君は、これをはじめは何心なく読んで行かれたが、読み行くにしたがって、何だか妙な気持がした。日頃苦しんで〳〵居る間に、心の中に何か出来てあったが、それを云いあらわす言葉をもって居なかったのを、あだかも釣針を腹の中に入れて、わが思うて居たことを次第に引き出されるような心地であった。いかにも、この人生の上において、人を目当にしては何時までも駄目である。真の同情あるものは仏陀ばかりである。常に我等の身に添うて、如何なる時、如何なる場合にも、我がために真情をそそいで下さる真実の朋友は、仏陀ばかりであると深く心に感じ、一枚読んでは泣き、二枚読んでは泣いて居った。

そのときかたわらに一処にはいって居った一人、これは賭博犯の者で、その人が此君の今の様子を見て、不審に思うて、あなたは其本を読んで、何故そんなに泣くのか、其本には何が書いてあるかとたずねた。此君が答に、此本には自分が云おうとすることが皆書いてあるから、思わず涙

にむせんだのである。自分が思うには、犯した罪がなくて入監してさえ不運であるのに、その上に心配をして、我と我が身体をそこなうまでに自分を苦しめるのは、実に愚の話である。今までは身に覚えのないのに罪におちいるのは実に残念であると、色々に世を恨み人を恨みして苦しんだが、これは全体我々の目当が間違って居ったからである。我々人間を力にすべきでない、我々の力となって下さるものは仏陀ばかりである。法律に対しては無罪であるが、仏陀に向っては自分はとても無罪とは云いきれない。人間同士ならば、或は無罪である、潔白である。決して賄路（わいろ）を受ける約束もしていないと云えるが、さりながら心の中はなかなかに汚れてある。種々さまざまの罪をいだいて居る。仏陀冥鑒（みょうかん）の前には、実に沢山な罪を持っている。形の上ではとにかく、精神の上では、自分は正に罪の塊（かたまり）である。仏陀の前と思えばとても無罪を云いはる勇気はない。もう弁解も弁護もあったものではない。またすでに満身同情の涙でながめて下さる仏陀のましますに以上は、仏陀の御導きにまかせて、結果を気遣うにおよばぬ。してみれば今日よりは、唯自分の為すべきことを為して行くべきである、とこのように語った。此君の信仰は実に立派である。けれどもいまだ御縁が至らぬと見えて、この立派な信仰の話も、相手の人にはさほど深い感じをあたえなかった。

此君が信仰に入ってより後は、一筋に仏陀の慈悲を喜びつつ、一層真面目に立ち働かれた。獄中ではとかく下の者に掃除などさせるにかかわらず、此君は毎日厳重に自ら掃除をせられた。便所は数日に一度という規則なれど、前日に殊に清潔に掃除せられた。かく及ぶだけは他のもののすることまでも自ら為し、力を尽くして人の世話をもする。他の者も喜んで此君をば兄の如く、親の如くに、親しみ敬うようになった。

此君は、自分の胸中の煩悶が去って、洗うたようにスガスガとなって来たので、サアどうも他の身の上が気の毒に思われて仕方がない。自分と一処に居る賭博者が、殊更に不憫である。そこでいろいろと語り聞かせた。この者は或る処で賭博をして居た処へ偶然立ち寄った、そこへ巡査が踏みこんで来たので、驚いて灯火を消した時に、その中のある者は、黒暗を幸に巡査をなぐった。此男は運わるくその時捕えられた中の一人であったが、裁判所で調べられる時に裁判官が巡査に「ドンな者が君をなぐったのか」と尋ねたら「顔にアバタのある者」と答えた。「然らば彼の者か」というて今の男を巡査に引き合せたら「彼の者であります」というたので此人は事実上打ったのではないが、よんどころなく入獄することになった。此人はなかなか元気

の者で、獄中に居っても、一向平気であったが、其後ある日、妻が子供を連れて面会にきた。あだかも其日どういう訳か、七ケ年の禁獄に処せらるることになるだろうというので、ガッカリと力を落して大層に苦しみだした。

その晩、此君に向って懺悔して云うには「これは私が悪るかった。あの時は巡査を打ちはせなんだが、場合によっては打つようなことになったかも知れぬ。唯その時は機会が無かったから手を下さなかったのである。本来かくの如き場所に近づいたのが悪かった。これはたしかに御戒めである。私もこれから改心いたします」と涙ながらに懺悔をした。

これを聞いて、此君は、ああ人間には階級差別の無いものである。此人が思いがけなく官吏殴打の刑に陥るも、我身が覚えなくして収賄の罪におちるも、少しもかわりはない。又彼の苦しむも、我の苦しんだも同様である。これらの点に至っては、学問地位の有無も何もあったものではない。仏陀の御前においては有罪も無罪もない。同じ急所をつけば同様に痛みを感ずるのである。人間という人間は一同に皆、唯仏陀の慈悲に浴するより外に、安心の道はないと深く感じたので、黙って居られないで、さらにその人に如来の慈悲のありがたいことを話した。そうすると此度は彼も大いに喜んでくれた。先方が喜ぶ程、いよいよ此君の胸中に満足の感じがあふれた。人生このうえに出ずる幸福はない。獄にはいったればこそ、此妙味を知ることが出来たと、大いに喜んで、獄中に居ながら非常に愉快である。まるで獄中ということを忘れたかの如く、何の苦もなく日を送って居られた。

かれこれして居らるるうちに、昨年（明治三十六年）の四月になって、突然此君の無罪ということが知れて、出獄を命ぜられ、同時に文部省からは、本官に復してただちに任地に赴けとの命令であった。

出獄の時に、自分の信仰を、典獄の藤沢正啓氏に話された。その時の此君の態度が、如何にも気高く美しかったので、見るものが皆感じ入った。このとき体重をはかったところが、獄中にあってしかも麦飯を食うて居たにもかかわらず、入獄の当時よりも、大分に重量が増してあったということである。

藤沢典獄が小河監獄事務官にこの事を話された。小河氏はご存じの通り日本の司獄官の中心であって、ことに不思議の仏縁により、常に共々に仏陀の慈悲を喜ばして貰うて居ることゆえ、その事柄を私の方へ伝えられて、且つ私の方より此君に沙汰をしたれば、直接に一度心中を披瀝したいとのことであった。その時私は、教科書事件に関係して入獄された人達から沢山な手紙を頂いておったが、それを調

べると、此君からは三通まで頂戴して居った。そこで私はとび立つばかりに喜んで見舞いやら喜びやら感謝やら、自分の心に溢れてあるものを、そのまま書いて差し上げた。然るに此君は、急いで任地へ赴かねばならんので、忙しくて寸暇もないのに、わざ〳〵私の求道学舎へたずねて見えて、よろこびを述べ、翌日の日曜講話を聞いて、その足で任地へ帰って行かれた。

それからまたその年の夏、此君と監獄に一処に居ったという人が求道学舎へ来た。何事かと思ったら、此人が裁判所でいよいよ判決という場になって、裁判官が、その撲られたという巡査に、たしかに此者が打ったに相違ないかとたずねたら「多分その男かと思われます」と答えた。「かと思われる」では有罪の証拠にならぬ。此者であるかないか明了に答えよ、との事であったが、そこで巡査がしばらく首を傾けながら「此人でない」と答えたので、無罪放免の宣告となったという。そのよろこびの知らせであった。

今まで仏陀を拝むことの無かった人が、監獄の中まで追いつめられて、とうとう仏陀の光に接することになる、実に不思議の至りであります。

此君の出獄の当時に、私は求道学舎の静観室にあって、観音経を拝読しつゝあった時に、何気なく

『たといまた人有り。若しは罪無くして、枷械枷鎖（ごかいかさ）、其の身を検繫（けんけい）せんに、観世音菩薩の名を称せば、皆ことごとく断壊して、即ち解脱を得ん』

と云うところまで読んで行くと、アーこれであったと、一種云うべからざる神聖なる霊感が、胸をつききたって、思わず知らず感涙にむせんだことであった。観音の力とは畢竟仏陀の慈悲の力である。これ実に私が実験の信仰と名づくる点である。しかしてこの実験の信仰なることは、私の懺悔と、また私の書いた書物によりて同じく仏陀の光に接せられた此君の話によって明瞭であると考えます。

しかるにこの実験の信仰なることは、私やこの君によりて初めて起ったことではなくて、本来仏教それ自身の起源が、仏陀の実験にして、殊に浄土他力の信仰は、この君の如く不幸にして獄中につながれ、私の如く罪悪を観じて煩悶におちいった悪人が仏陀の光に接して救済せられた事実、即ち仏陀在世の時、王舎城中に起りたる一大悲劇がそれであって、彼の観無量寿経にあらわれたる韋提希夫人の獄中の得忍（とくにん）、涅槃経にあらわれたる阿闍世王の無根の信を生じたる、これ実に実験の信仰の濫觴（らんしょう）であります。

我聞如是

池山栄吉

二　河白道

信への心の推移は、次の善導大師の説いた二河白道の譬喩に合わせてみると明確にすることが出来ようと思う。

一　人法師

西に理想の郷を求めて、千里の道を遠しとせずして旅路にのぼった人がある。日数も大分かさなった或日のこと、荒涼たる曠野（あらの）にさしかかって、人子一人通らない寂しい中を一人法師、とぼとぼと歩いていると、はるか後の方からして、強盗追剝（おいはぎ）とおぼしいやからや、見るも恐ろしい獰猛（どうもう）な野獣などが、うちむらがって我さきにこなたを目がけて跳んでくる。

これはとばかり驚いて、一目散に足も空に、前へ前へと逃げ出したが、行手の地平線上に何かひとすじの、左半分は真紅で、右半分は真青の帯みたようなものが目についた何だか変だと思いながら、だんだん近づいて見ると、此はいかに、あかいのは火の河、青いのは水の河であったとわかった。河幅はようよう百歩を出まいと思われる程だが、南へかけても北へかけても、見渡すかぎりはてしがなく、波浪や火焔の凄まじさで、底の知れない深さが見える。

もっとも両河の間には一つの道があって、向うの岸まで白く見えわたっているが、その幅といったら僅かに四五寸ほどしかなくて、おまけに四六時中波に洗われ、焔に焦がされているという始末だから、とても通って行けそうにない。旅人ははたと窮して立止まった。

進退維谷（きわまる）

が、うしろからは悪漢や猛獣がもう間近にせまって来ている。北から南へ身をかわそうとすると、そこにも猛獣や毒虫が沢山居て、先を争って向かって来る、さればといって西へ向かって進もうなら、水の河か火の河か、どちらかにおちて了うはしれたこと、進退ここにきわまって余りの恐ろしさに魂も消え入るばかりであった。

旅人はとっさの間に思案を決めなければならなかった。

今この場合あとへ引き返しても死ぬ、前に進んでも死ぬ、左右に避けても死ぬ、止まっていても矢張り死ぬ。どの道死ぬときまっているのなら、ままよいっそ進んで此道を通って見よう。とにかく道があるからは、通って通れないこともなかろう。

そうだ、そうしよう、と思った途端（とたん）此方の岸に声があって、さあさあ思い切ってこの道を行くがよい、そうさえすれば、死ぬ気づかいはない。若しためらって其処にいると、どうでも死ぬにきまっているぞ、とすすめるのが聞えたと思うと、今度は向うの西の岸から、迷わずに疑わずに、ただ一筋に此道を通って来い、私がきっと護ってやる。水の河にも火の河にも落ちる心配はさらにないぞと呼ばわる声が耳に入った。

声に　き　く

こなたの岸で勧める声、かなたの岸で喚（よ）ぶ声に、行くべき道はただこの道だと、いよいよ思案のきまった旅人は、にわかに云いしらぬ頼もしさが胸に湧きあふれるのを覚えて、今はもうすこしも疑うところなく、おめずおくせずまっしぐらに進んで、一歩をかの白道（びゃくどう）に踏み入れた。

東岸にあってこの有様を見ていた悪漢どもは「あぶない あぶない、そんな険悪なところを行った日には生命がない俺達は決して悪意があるのじゃない。だからすこしもこわがるにはあたらない。サアサア早く引返し給え」と、声を優しくして呼びもどすが、旅人はそんな甘言には乗らないで、わき目もふらず一心に、遮二無二に足を運んで行くと間もなく彼岸に到着して、すっかり諸々の悩みから離れて久しい間自分の来るのを待ちかねていた善い友達と顔を合わせ、永劫かわらぬ慶びを正に享受しつつある。

譬喩のこころ

この譬喩で、東岸とあるのは、火宅無常のこの娑婆世界西岸とあるのは、法性常楽の安養界を指し、悪漢、野獣、毒虫というのは、私達自身に具足している煩悩。水火二河も矢張りそうで、水の河は貪愛、火の河は瞋憎を象徴し、荒涼たる曠野とは、私共のたよりにすべき何物もない心淋しい有様をあらわし、中間の白道というのは、私達の貪瞋煩悩の中にも、一心帰命の信心の起り得る可能を、また水波火焔が道をおおうというのは、私達が弥陀の心光照護の下に煩悩を断ぜずして涅槃に到るこの世の道を示し、しかして東岸の声とは、釈尊の遺教、西岸のそれは、弥陀の本願招喚の勅命を意味したものだ。

耳をたつればなつかしや
かなたこなたにこがくれて
鳴く音をもらすほととぎす

無碍の一道

西方の寂静無為のみやこに志して、歩みをはこんだ私がはじめの程は、彼方に名勝をさぐり、此方に旧跡をたずねるなど、のんきな旅行気分にふけっていたが、とうとう、断悪修善の曠野に行きつまって、手も足も出なくなってしまった折柄、よき人、親鸞聖人の声にきいて、心機一転（しんきいってん）、大悲選択（せんじゃく）の願心に信順し、活路を無碍の一道に見出して、念仏成仏する身の上となった。これが私自身の二河白道の体験だ。

久遠劫よりこの世まで
あわれみましますしるしには
仏智不思議につけしめて
善悪浄穢もなかりけり

ただ不思議

「慶（よろこ）ばしい哉、心を弘誓（ぐぜい）の仏地に樹（た）て、念を難思（なんし）の法海に流す。」

親鸞聖人の慶歎そのままを頂いて、満腔の感謝を表することばとしたい。おもえばただただ不思議というの外はない。どうしてこの疑い深い私が、絶対他力を信じないではいられないようになったのだろう。

痴人の夢

コロンブスが、欧洲からどこまでも西へ西へと航海すると、恐らく印度の東、または日本に着くだろうと主張した当時は、それに耳を傾けるものはほとんどなかった。行けば行ける航路でさえそうであった。もしまだ航空機の発明されない前に、欧洲から空中を通って日本に着けるという者があったとしたら、一笑にだも値しない痴人（ちじん）の夢として誰一人相手にするものはなかったに違いない。しかしコロンブスは果して新世界を発見した。欧亜大陸の横断飛行は今日すでに実現された。（大正十一年頃のこと）

自力聖道

地面を垂直に掘下げて、どこどこまでも止めなければ、対極の一地点に出るということは、地球が丸いものだと知ってるほどの人は自明の理として疑いはすまい。仏道に志すほどの人ならば、自力聖道の歴劫修行によって成仏することが出来るという道理は疑いをさしはさむものもあるまいが、真面目にその実行に着手して飽くまで止めない人が果してあろうか。

自力聖道の菩提心
こころもことばもおよばれず
常没流転の凡愚は
いかで発起せしむべき

横出と横超

西航すれば極東への近道が取れるという説に信を置くも

のがすくなかったように、他力の願船を借りこんで、自力の諸行念仏を艪櫂（ろかい）として、無量光明の彼岸に着こうという、いわば遠い陸路を竪（たて）に歩いて行くかわりに、近い水路を横に切ろうという考えは、すでに賛同者を見出しにくい。

いわんや絶対他力に乗托（じょうたく）して、横ざまに迷界を飛び超そうという横超他力の信念に至っては、あだかも飛行機を見聞しない世にあって空をかけようというようなもので、これほど非常識な、不可思議なものはあるまい。

願力成就の報土には
自力の心行いたらねば
大小聖人みなながら
如来の弘誓に乗ずなり

難中の難

他力信仰の難いのはここだ。難中の難、これに過ぎたるはなしといい、往き易くして人無しというのはこれがためだ。教行信証の信巻のはじめに、

「常没（じょうもつ）の凡愚、流転の群生、無上妙果の成じがたきにあらず、真実の信楽（しんぎょう）実にうることかたし。何をもっての故に、いまし如来の加威力（かびりき）によるが故に、ひろく大悲広慧（こうえ）の力によるが故に」

億劫にも獲（え）がたい真信を獲さしていただいた私達は、ただただ大悲矜哀（こうあい）の善巧を慶喜奉讃するのほかはない。

不思議の仏智を信ずるを
報土の因としたまえり
信心の正因うることは
かたきがなかになおかたし

時節到来

ここに時節の到来ということについて一言したい。蓮如上人御一代聞書に

「時節到来ということ、用心をもしてその上に事の出来候を、時節到来とはいうべし。無用心にて事の出来候時節到来とはいわぬ事なり。聴聞を心にかけてのうえの宿善無宿善ともいうことなり、ただ信心はきくにきわまることなる由に候」

とある。信心は弥陀からたまわるものだからと云って、得られなければ、ほっておいてよいという次第ではない。

「洪鐘（こうしょう）ひびくといえども、必ず叩くを待って鳴る」

如来の方では叩くのを待ちかねていらっしゃるのだ。だが、切実な求め心がなくては、与えられるにしても受けようとしないから駄目だ。

人事を尽して天命を待つ、という俗訓は、獲信の心得にもあてはまる。そして切実な求め心を誘発すべき外縁は、銘々のため、とうから十分に準備されてあるのだが、気づかれないのは悲しいことである。

子の母をおもうがごとくにて
衆生仏を憶すれば
現前当来（げんぜんとうらい）遠からず
如来を拝見うたがわず

（註）子の母をおもう云々とあるが、この子はまだ幼児の心だね、と先生は加えられた。

同信の友

蓮如上人はまた信仰を促進する心得として、仏法者にはなれ近づけ、ということを繰り返し〳〵仰言ったものだ。

それにつけ憶（おも）い出されるのは、かって欧洲で友人（近角先生）と、聾唖院へ参観に行ったら、丁度芝居の催しがあるというので、見せてもらったことがある。ところが見物も役者も聾唖者ばかりなので、彼等同士はしきりに指頭を動かして、面白そうに理解し合っているが、私と友人にはさっぱりわからない。何だか此方が聾唖者になったようだと云って、相見て苦笑を禁ずることが出来なかった。

常に無信心の人ばかりの間に立ち交っていると、あだかも、聾唖院の芝居を見ていると同様、信仰のない方が健全なので、信仰のある方が病的なような気のすることがある。そんな調子の生活では信仰の助長されようはずがない。二河白道の旅人が、人なき曠野を行く、というのも、同行や善知識を友にもたないことを寓（ぐう）したものだ。

其人の心を知らんと思わば、その友をみよ、人は知らず識らず交友の感化を受ける。もつべきものは同信の友だ。

「絶対他力と体験」より

江州木ノ浜の新七同行の言葉

お前は遠方からわざわざたずねて来てくれたが、定めしわしじゃというて更に変った心はないわいな。

お前の心とわしの心と一寸も変りはないわいな。お前その心がわからなんだら、何辺でも相談に来ておくれなよ

お前その心のなりでよいのじゃけれど、それを得心してくれぬだけが不足じゃわいな。

この新七は、必堕無間という大きな高札おいねて、頭があがる身ではないわいな。お前やわしのような片輪な者は、とても有難い信者にはなれぬで、このままたすけて貰うまいか。うまいことじゃ、うまいことじゃ。うまい身にしてもろうたわいな。

晩年の祖師聖人

福島政雄

上寿は八十、中寿は七十、下寿は六十と称せられている。私共の祖師親鸞聖人は九十歳まで生きられたので、六十はまだ初老、三十年の将来があった。六十歳の聖人は関東にあってそろそろ京に帰ることを思い立っていられたことと思われる。

なぜ帰京を思い立たれたのか。人間が六十にもなれば生まれ古郷がなつかしくなる。聖人もそんなお心持ではなかったか。京都は聖人にとってはなつかしいふる里である。日野のお生れであるとすれば京都の郊外ともいうべきところ、御父君御母君にはやく別れられたとは言え、その父母いませし日の御想（おも）い出はかすかながらおなつかしかったであろう。いな、かすかなればこそなお一層の御なつかしさがあったに相違ない。そのお心持から御帰京になったということは如何にも御もっともの次第である。

しかしそればかりではなかったであろう。関東では御同行の数が次第に増して、御生計も割合に楽であったかと思われるのに、その生活を振りすてて京都へお帰りになったのには、よくよくの御事情があったかとも考えられる。それは関東で聖人を中心とする教団組織が出来そうになったので、これを避けて京都へお帰りになったのだろう。教団が出来るということは一宗の発展ということから言えば善きことのように思う人が多いであろうが、聖人のお心持では、教団は純信仰のさまたげになると考えられたと思う。どこまでも純一の信仰を求められた聖人としては当然の事と思われるが、併し一方から考えれば、聖人には「斯の道や行く人なしに」というような寂しいお心持もあり、真実の御同行を求められる心持から京都にお帰りになったということは考え得られる。此の事については歎異抄第二章が多くを物語るものである。

更に俗的な考え方をすれば、聖人には御家庭の問題が相当に深刻であったろうとも思われる。それは善鸞（ぜんらん）の問題である。京都では法然聖人のお弟子になられた

時代に我が聖人は結婚されたかどうかは疑問であって、玉日姫の事が後世の作り物語であっても、誰か御相手があって、善鸞はその人との間に生れられたのであろうと考えることにも理由はある。後年関東での善鸞の心の荒（すさ）みも見れば、此の人は何で心が荒んだのか、それは継子であったからという考えがなり立つ。恵信尼（えしんに）は北越の生れであり、立派な方であったということはそのお手紙に表（あらわ）れているが、しかも継母継子という関係は悲しいことであったに相違ない。此の関係が善鸞を荒ましめたと考える理由はある。それで聖人は堪え難い淋しさに堪えて恵信尼と別れ、聖人は京都にお帰りになり、恵信尼は御自分の腹に出来たお子達をつれて越後のお里に帰られ、而して善鸞は関東に残してその世話を御同行達に御依頼になったと考える余地がある。

それに京都では末の御子覚信尼（かくしんに）が大変にお気の毒な不遇の有様でおられたので、聖人はそのためにも京都にお帰りになり、父と娘との助けつ助けられつの生活にお入りになったということも考えられる。此の覚信尼に逢うために、恵信尼も越後から数度京都に来られたらしいと考えられる。それは恵信尼の御消息によって何となく感ぜられることである。

兎に角六十歳の聖人には家庭の苦悩の問題が相当に深刻であったことを想像し得られるのである。その苦悩裡において聖人の信仰はかがやいて来た。教行信証の御述作も京都にお帰りになっての後であるということが本当であろう。寂寥（せきりょう）と苦悩の中でいよいよ如来の悲願の広大なことを感得せられ、そこに教行信証も生命あり、血のしたたるような御述作となったではないであろうか。「愛欲の広海に沈没し」と告白せらるる聖人には、生きた血のしたたる家庭問題が裏づけられているということは、私の勝手な独断ではないと思う。

然らば善鸞の問題は如何であるか。これは聖人の苦悩の中心であったと思われる。聖人の若い時代の最初の御子、その母君は或は聖人の恋の相手であったとも想像出来る。もっとも越後時代以後の聖人は「愚禿（ぐとく）」という深い自覚に入られて、恵信尼との御結婚は恋というようなことではなかったと思われるけれども、若い京都時代には恋愛の経験も持たれたかも知れない。兎に角善鸞は聖人にとっては殊にあわれと思われた御子であったことと思う。それをひとり関東に残して六十を越えられた聖人が、ひとり京都へお帰りになるという時のお心持はよほど淋しかったに相違ない。家庭問題に行きつまって、別れたくない恵信尼ともお別れになり、最も心にかかる善鸞を関東に残して孤影さびしく京都にお帰りになる、その京都にはまた淋

しい覚信尼がお父様を待っておられる。箱根の関を越えて京都へ向われる聖人のお心は想像も及ばぬものがあったと思われる。

京都へお帰りになると関東では数年ならずして善鸞の邪義がはじまる。関東の御同行達の間には迷うものもある。そこで真剣な御同行達がはるばる十余ケ国の境を越えて京都に来て信仰問題をお尋ねする。そこに歎異抄第二章の場面があらわれたと思われる。

かようになれば聖人としては善鸞をそのままにさしおかれることが出来ない。ここに善鸞の義絶という問題がおこる。此の義絶は建長八年の事であるというから聖人の帰浴から二十年の後のことである。聖人が最もあわれと思われた善鸞については長い月日の間、すなわち短くとも十余年苦悩を続けられて、遂に義絶のことを決意せられたのではあるまいか。義絶の御消息として伝えられるものの中の、「悲しきことなり」の一語は聖人の無量の感を物語るものと思う。

それは聖人が六十余歳で関東を去られる時に既に予感せられていたことであろう。特別にあわれと思われた御子は教界を乱す御子であった。聖人は御自分の宿業を痛切に感ぜられたことであろう。今生に如何にいとおしふびんとおもうとも思うが如く助け難いという歎異抄のお言葉はかようなところから出たのではないであろうか。かようにして六十余歳以後の聖人は真に独生独死独去独来の人生をしみじみと感ぜられたことと思う。それは人生の淋しさのどん底である。愛欲の広海に沈没せられる聖人であるだけにその淋しさは殊に深刻であったことと思われる。

此の人生どん底の淋しさの中に聖人はいよいよ深く如来の悲願を讃嘆せられた。如来の悲願の中に人生無限の淋しさが融かされて行く。そこにしみじみと念仏せられたのが晩年の聖人であった。弥陀の五劫思惟（ごこうしゆい）の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためと受けられた聖人のお心持は深い無限の深さがある。五劫思惟の願は切々として聖人の胸の奥深くひびいて来る。聖人は唯ひとりその悲願のひびきそのものである念仏の中に老年の歩みをつづけられる。

しかしその晩年の聖人には底力強い生命がつづいた。その力強い生命から御本書教行信証をはじめ三帖の御和讃も多くの御消息も自然法爾章（じねんほうにしょう）も生れ出でた。聖人の脳は特別にすぐれた脳であったと打仰がれる。六十歳以後少しも衰えず、老いてますます深い心の活動をなされて九十歳まで生きとおされた。その心の力は弥陀の五劫思惟の願を親鸞一人のいのちに受けられたところから湧き出でた力である。それは六十歳以後に淋しく唯一人の道をふみしめて粛々として進まれた聖人のとうとい生命の底力である。

（昭和四十六年十月八日稿）

念仏詩抄

木村無相

もいちど

もいちど
相手を
見なおしましょう

どれほど
すきとおもうても
きらいとおもうても
死なないひとは
ないのです

もいちど
相手を
見なおしましょう

生の意義と喜び

生の意義とは

ミダに遇うこと
遇うたら
この世が
よろこべる

雨がふろうが
風がふこうが

〃よび声が
ちからなりけり
旅のそら
雨ふらばふれ
風ふかばふけ〃

山のごとくに

山にむかいて
おもうこと

山にむかいて
おもうこと

山のごとくに
生きんかな

根　源

この世　あの世をつらぬきて
わがしあわせの　根源は
ナムアミダブツの
ほかなかりけり

ただ　ナムアミダ
ナムアミダ
ナムアミダブツ
ナムアミダ

機法一体

われをタノメの
にょらいのおおせ
世間をタノメと
おっしゃらぬ

タノメというは
ナムアミダブツ
タノムというも
ナムアミダブツ

機法一体
ナムアミダブツ

まもられて

〃ナムアミダブツを　とのうれば
十方無量の諸仏は　百重千重囲繞して
よろこびまもり　たもうなり〃

わたしをとりまく　一切が
諸仏であると　いま知った
一切諸仏に　まもられて
今日あるわたしと　いま知った

ナムアミダブツに
知らされて——

不思議な

不思議な　不思議な　ナムアミダ

いろいろゴタゴタ　おこるけど
ナムアミダブツが　顔出すと
いつしかゴタゴタ　とけっちゃう

不思議な　不思議な　ナムアミダ

生きるんだ

生きるんだ
生きるんだ
ぼんのうの一生を

生きるんだ
生きるんだ
生きるんだ
無常の一生を
ぼんのう人
無常が
人間の一生

ナムアミダブツと
生きるんだ

畢　竟依（ひっきょうえ）

さびしきときも
ナムアミダブツ
かなしきときも
ナムアミダブツ
うれしきときも
ナムアミダブツ

みおやの名こそ
——ひっきょう依

友　よ

この世のものは
みなかわる
かわらぬマコト
ひとすじに
もとめて友よ
すすめかし
かわらぬマコト
ナムアミダブツ

こころよ

こころよ
どこへ——

師弟一味（続）

花田正夫

（一）

無刀流の名人、山岡鉄舟居士（こじ）が修行の時代、一刀流の名人、浅利師範の門に入った。鬼鉄とあだなされるほどきびしい修行によって、ようやく技倆は師範を凌（しの）ぐまでになったが、いざ師に向うと、山が前につかえるようで自由に打ちこめなかった。

そこで若い頃から身は剣で錬え、心は禅で調えるということを家訓としていた居士は、もうこの上は技ではなく心であると思いさだめよき師を尋ねて参禅し続けた。丁度その時、天竜寺の滴水老師（てきすいろうし）にめぐりあって、自分の考えをありのままに述べて、御教を乞うた。すると禅師はすかさず

「物を見る時、目の悪い者は眼鏡をかけるが、あんたの言うこともそれと同じである。早く眼鏡のいらぬようになりなさい」

と諭され、洞山大師の頌（しょう）を提示された。

両刃鋒を交（まじ）えて避くべからず
好手還（かえ）って火裏（かり）の蓮の如し
宛然（えんぜん）として自から衝天の気あり

この文意は、二人のすぐれた武芸者が互に鋒をまじえて死ぬか生きるか、絶対絶命の土壇場に追い込まれている。この時、火の中でもすこしも焼けず見事に咲く蓮花のように、好手があって、すこしも傷つかずに立派に切り抜けられて意気益々さかんな道がある、どうだ〳〵、ということであろう。

居士はここでまた難関に逢遇した。そうした時、一人の実業家が揮毫をたのみに来た。居士が早速そのことに取りかかっている時、実業家は自分の事を述懐した。

「私は裸一貫で東京に来まして、険約してすこしまとまった金が出来ましたので、物を買いこみました。ところが物価が段々さがって、しまいには心配のはて、もうどうにでもなれと捨て鉢になっておりましたら、どうしたことか、景気が次第によくなって、同業者が元価よりすこしよい値で買いに来ました。すると今度は欲が出て、

もっと〳〵と思っているうちに再び値下りとなり、結局損をして売りました。この時反省しました、いやしくも一流の実業家になるには、値段の上り下りで、ビクビク動揺するようではいかぬ、これからは平常の冷静な時に内外の事情と物の真価を見極めておいて、時々の相場の動きに目もくれないで仕事をやってまいりましたら、どうにか大きな失敗もなしに今日におよびました云々」

と。居士はこれを聞くと、深く身にうけて、剣の修行には、上手な人からも下手な人からも教えを汲みとらねばならぬのに、下手と見ると軽蔑し、上手と知ると畏縮するようでは、時の値段の上下で心の動揺するのと同じであったと大いに気づき、道場に走り、一刀をエイと振りおろした刹那、居士の前には師範の幻影はすっかり消え去って、鞍上（あんじょう）人なく、鞍下馬なしの境に達したのである。やがて浅利師に稽古を乞うと、道場で立ち向うなり、師範は、貴下はすでに極処を得ている、とたたえて、一刀流の免許皆伝をさずけたのである。居士はこの日を終生よろこんでいる。以上は、清廉の士で鉄州居士を終生慕うておられた谷田左一氏著の『山岡鉄舟』に教えられたものである。

次に、道元禅師は、各地に名師をたずねたけれど心ひらけず、苦労して中国に渡って、天童山の如浄（にょじょう）禅師のもとに参禅した。然しさとりの道はとおくきびしかった。同行の友は病を得てすでに客死したけれど、心の眼は開けなかった。そうした頃、寸暇を見ては彼地の高僧方の公案や言行を書写して、帰国の日の土産と願っていたが、同門の先輩からきびしく「そんなものは先師の味ったカスだ。何故に汝自身にその言葉が自由に出る道を得ようとしないか」と呵責され、只管（しかん）打坐（だざ）を勧められた。

こうして大疑団の雲にあった或日、隣りに坐禅していた中国僧が、ツイ居眠りをした。如浄禅師は拳骨和尚と呼ばれたきびしい師匠で、スカさずその僧を痛罵してたしなめた。これを聞いていた道元禅師は、自分は日本から生命がけでここまで来ながら、形ばかりは真面目そうに坐しているが、心は深い居眠りにおちていたとハッと目覚めるなり心眼がひらけ、悠然と立ちあがり、仏前に礼拝しようと進み出た。すると異様の道元禅師の姿に大いに感じた師匠は「身心脱落（しんしんだつらく）せしや、身心を脱落せしめしや」と詰問した。

しかし道元禅師は、それには一言も答えず、ねんごろに仏拝し終えて、「和尚、みだりに人を印可（いんか）することなかれ」と、こたえると、師匠は弟子を拝み、また弟子は師匠を拝んで一味の悟道にかえった。そこには師匠か

らの印可さえもいらぬ、大道長安に通ずる天地が洋々としてひらけている。

ニイチエは、ツアラストラの中に

「いたずらに師よ、師よと追従することのみが、真に師につかえる道ではない。速に師の冠を取って着よ！その時にこそ師は心からよろこぶであろう」

と述べている。

（二）

これまで、師弟一味の例を種々とひろいあげたが、親鸞法然の両聖の一味の信の消息をのべよう。御伝鈔に、

「いにしえわが大師（法然）上人の御前に、聖信房、勢観房、念仏房以下の人々多かりしとき、はかりなき浄論をしはんべることありき。その故は恩師上人の御信心と善信（親鸞）が信心といささかも変るところあるべからず、唯一つなり、と申したりしに、この人々とがめて云く。善信房の、恩師上人の御信心とわが信心とひとつと申さるることいわれなし、いかでか等しかるべき、と。善信申して云く。などか等しと申さざるべきや。その故は深智博覧に等しからんと申さばこそ、まことにおおけなくもあらめ、往生の信心にいたりては、ひとたび他力信心のことわりを承りてよりこのかた全く私なし。然れは恩師の御信心も他力より賜わらせたまう、善信が信心も他力なり、と申しはんべりしところに、恩師上人まさしく仰せられてのたまわく、信心の変ると申すは自力の信にとりてのことなり、即ち智慧各別なるが故に信また各別なり、他力の信心は善悪の凡夫ともに仏のかたよりたまわる信心なれば、源空が信心も善信房の信心もさらに変るべからず、ただひとつなり、我が賢くて信ずるにあらず、信心の変りおうておわしまさん人々は我が参らんずる浄土へはよもまいりたまわじ、よくよく心得らるべきことなり、と云々」

とある。

又、教行信証の末尾に、法然上人から選択集の見写を許され、内題の字を真筆で書いて頂き、その上に御真影の図画をも許され、そこに御銘文の真筆まで頂かれた御恩を、

「是れ専念正業の徳なり、これ決定往生の徴（ちょう）なり。よりて悲喜の涙をおさえて由来の縁を註（しる）す」

と随喜渇仰の情を吐露せられている。これ等は歎異抄末尾の信心一異の文と同じ信心一味のお喜びである。

ここに一味の信とは、人夫々に、自分こそは聖人の御真意をうけている、聖人の信心と一味であるとひとりぎめすることではない。

また、皆、如来からたまわる信心であるから一味であるはず、と大ざっぱに言葉だけで理解することでもない。

ここの心境を知るよすがとして、法然上人に一味であるはずがないと主張する、聖信、勢観、念仏房などの立場に目を向けよう。

聖信房ははじめ密教と天台の学者であったが、のち世間の名利をいとうて法然門下に入った人で、親鸞聖人より三つ年下で、当時二十九か三十歳であった。

勢観房は平重盛の孫で親鸞聖人より十歳の年少者であるが、若年にして法然門下に入って御往生まで、前後あわせて二十年間常随して戒律堅固な律法的な求道者で、当時二十二歳位であった。

念仏房は法然上人の有名な大原問答の時、各宗の学僧に伍して、浄土宗立教開宗への法論の敵方の一人であった。極めて真面目な道心者で、天台の学に通じていたが、大師上人の信徳に感じて吉水の禅室に入った。親鸞聖人より十六歳の年長者で、法然上人御滅後に大疑団を生じ、〃「彼仏今現在成仏したまえり、衆生称念すれば必ず往生を得るなり」とあればこそ我は勧むるなり〃との故上人の夢告をうけてはじめて疑雲永く晴れた人で、当時四十八・九歳であった。

ところが大師上人は日本仏教史上に稀に見る学徳兼備で人格円満の師であった。このことは師の御影像からも容易にうなづかれることである。それだから聖信房にして見れば、自分の習得した学問では及びもつかぬへだたりを覚えたであろう。勢観房は戒律は立派であっても、老上人の金剛戒師としての徳力には全くお足元にも及ばなさを感じたであろう。また道心堅固な念仏房は、金剛の真心の徹到された恩師の自由な活動と感化力に比し、若存若亡（にゃくぞんにゃくぼう）、点滅不安の自信を恥じ入ったことであろう。

だのに、三十そこそこの親鸞聖人が師と信心が一つであると何かのはずみにひとりごとをされたことが大問題となったのである。しかし親鸞聖人にしてみればそれは自明のことであった。御自身は「煩悩具足のわれらはいずれの行にても生死をはなるることあるべからざる」ものである、「いずれの行も及び難き身なればとても地獄は一定すみかぞかし」と信知せられる聖人にしてみれば、たのむべき戒律も、学問も、道心も何一つ持ち合せはない愚禿（ぐとく）の身であって「ひとえに本願をたのみまいらす」道一つに救いの光明を得られたのである。

こうした親鸞聖人の御心に、もとより御智慧すぐれ、才覚は群を抜かれてならぶものもない晩年円熟の大師上人をこよない人と尊崇せられたのであるが、その智徳の人並す

ぐれた大師上人も、出離解脱の大道においては、十悪・愚痴、心もことばもおよびもつかぬ身と、自照せられて、ただひとえに弥陀仏の選びとって下さった本願の念仏一つを渇仰されて、そこに往生の道を恵まれたのである。

こうしたことは次に誌す上人の言行録によればいよいよ明らかである。

或時、御弟子の弁阿が「上人のお念仏は智者にましますから我等が称える念仏とはすぐれていると思います」と申上げた時、上人はいかにも不機嫌なお顔をされて「そんなことは全くない。阿波介（あわのすけ・一文不知の陰陽師）の念仏も、法然の念仏も同じ念仏である」と誡められた。

又、或人が「往生は魚食わぬものこそすれ」と云い、又或人は「魚食うものこそすれ」と云って互に相論した時、上人がこれを聞かれて「魚食う者が往生するのであれば鵜こそ往生するであろうし、魚食わぬものが往生するのであれば、猿こそ往生するであろう。食うにあらず、食わぬにもよらぬ、ただ念仏申するものは往生するぞ」と、われの力のすべては、助けにもならず、さまたげにならぬ、本願の念仏一つで往生させて頂くのだと仰言っている。

又、ある時、「観念観法（かんねんかんぽう）をこらすことをさしおけ。たとえそれを行じてみても、雲溪（うんけい）が作る仏像の尊さも、観像（かんぞう）することも出来ず、また浄土を観じても、この世に咲く梅の香りや、桜の美しさほども観想（かんそう）することは出来ない。唯もっぱら称名せよ」と教えられている。

又、有名な仰せに「本願の念仏にはひとりだちをさせ助（すけ）をささぬなり。助さすほどの人は、極楽の辺地にうまる。助というのは、智慧・持戒・道心・慈悲をも助にさすなり。善人は善人ながら念仏し、悪人は悪人ながら念仏して、ただうまれつきのままにて念仏する人を念仏にすけささぬとは申すなり」とある。

又、常の仰せには「源空が智徳をもって人を化するなお不足なり。法性寺の空阿弥陀仏は愚痴なれども、念仏の大先達としてあまねく化導ひろし。我もし人身をうけば、大愚痴の身となり、念仏勤行の人たらん」とある。上人の智徳円満に才覚人並でないことをかえって悲しまれている。

このような恩師のお導きをそのまま身にうけられた親鸞聖人には、虚仮不実の身として、一切の自力の無効さと、その者を仏かねてしろしめして、ことに憐んで下さる大悲大願のたのもしさを随喜渇仰せられている。

われわれは不完全な凡夫の常として、相対差別の上からは、長所あり短所ありで、或はうぬぼれ、或はなげくにつて、慢心の毒、卑屈の垢がいつも自他共に害し続ける。

近角先生は、「善煩悩は金の鎖、悪煩悩は鉄の鎖で、どちらも自身を縛る点では同じである」と誡められ「とかく我々は善煩悩に幻惑されて何時までも苦悩し易いからよく注意せねばならぬ」と仰言ったとお聞きしている。前にのべた勢観房、念仏房、聖信房は、この金の鎖に縛られて、ひとえに弥陀をたのむという、絶対他力の信境、広大無辺の仏智を身にうけることが出来なかったのである。

親鸞聖人は、さればよきこともあしきことも業報にさしまかせて、手にもの持たでひとえに本願に帰したもうて、いよいよ我身の無智無力さを如来聖人の御前に打ちあけられている。その点は智徳兼備の恩師上人も全く同様で「余が如きの下機（げき）の行法は、阿弥陀仏、法蔵因位の昔かねて定めおかるるをや」と感佩（かんぱい）されて以来、よきにつけあしきにつけて選択本願の念仏をいのちとうけられて生涯を貫かれたのである。

如来大悲のお目当は、一切善悪の凡夫である。善悪とは申せみな煩悩具足の凡夫であるから、悪しきにつけては苦しみなやみ、善きにつけては迷い惑うて、生死の苦海はほとりなし、である。行けども〳〵光の影はささず、真暗な泥沼ののたうちである。聖人の仰せ通り「如来の願船いまさずば、いかでか苦海をわたるべき」である。

（三）

以上、両聖人の一味の信を長々とのべたが、さてこれを我身の鏡として身に味わわせて頂きはじめたことを誌す。

私は岡山生れで、六高時代に池山先生のお導きをうけ、更に近角先生の御著書からお教えを蒙りはじめ一方ならぬ御教化を得ておりました。その間、何時も、先生方は自分達とはちがって、雲の上の人、別人であるとしか思えなかった。ところが夜目・遠目・傘の内とよく言うように、遠くはなれて薄暗い中で娘さんを眺めると、非常に美しく見えるが、近よって明るい中で見ると、矢張り色々の欠点が目につく。そのように先生方に段々近づいてお導きをうけるようになると、もとより御立派な方々ではあるが、夫々に人間としての癖と申しましょうか、欠点と申しましょか、それが眼についてくる。そこに我々とちっとも変らない業報を持たれていて、先生方も自分で自分の始末がどうしてもつかない方で、そのことをかねてしろしめす如来の大悲大願一つを仰信していられる事実を知らされてきた。

近角先生は或時「相手のきれいなところだけ見えている間は遠いよそよそしい交際である。不完全な人間同志が近く親しくなればなる程相手の欠点も見える、それを知っての上の念仏の交りこそ大切である」というようなことを仰言ったとお聞きしている。よき人としての先生方は、矢張りそれぞれの欠点と長所を持たれていて、それを縁としていよいよ本願を仰がれている。欠点のない人格をよき人の上にもとめ勝ちであるが、これは凡夫としての機の真相を

知らぬ人の幻影であり、人の上に仏格を要求する痴人の夢であろう。

あともどり〳〵して辿るらん甲斐なきことに心迷いて

の一首は、近角先生の御晩年、ご長男の戦死、大病、そして生涯のご主張に反して非常時の名のもとに国家権力の無理実施によって矛盾の多い宗教法案が成立、そうしたお障りの多いお生活の中で常に愛唱せられたものであった。

又、近角常音先生は、常観先生から聞きとられた金句として、

「我慢のやまぬのはこまったものだ、可愛想なものだ」

の一句と

「またやりそこない〳〵、それだからお呆れないお慈悲でないか」

を、対句のように終生繰り返し〳〵御述懐せられた。そして「やりそこなわない信心なんかはない。いつまでもやりそこないのやまぬものだからお呆れのないお慈悲一つがありがたい」とねんごろに実際の生活に即してお教え頂いたことは私共の心に深く刻まれている。

晩年の池山先生が大病されてのち、御静養中にお伺いした時、ひとりごとのように、

「何が間違っても、かが間違っても、地獄一定ということは間違いないね」

とポツリと仰言った。私共の眼には、先生はいかにも悠々自適のお生活で、そこに念仏の花と香りが開きただようていることだけが美しく見えていたのに、この「間違いのない地獄一定」との一句は驚きの外はなかった。しかし次の瞬間に、あゝそうだったのか、先生の念仏の花は泥田に咲く蓮華のように、地獄一定の煩悩の泥沼の中に根ざしていたのだったのか、と深い感銘を受けた。

また或夏の午后、氷を運ぶ車から、氷が融けてポトポトとおちる水滴を指ざされて

「念仏は煩悩の氷がとけておちる水の音だよ。煩悩あっての念仏だね」

と言われたことも、深く耳の底にのこっている。

また或大雪の日、友人と共に先生のお宅を訪れた時、

「君方は、あの雪を何と見るかね！」

と聞かれた。友人が早速

「私共の煩悩のすがたです」

とお答えすると、

「そうとも見えるネ。わたしにはお慈悲と見える。もっとも煩悩とはなれぬお慈悲だからね」

と大笑いされながら共々念仏を唱和した。

先生の常念仏の渕源には、御自身でどうにもならぬ煩悩の氷、業障の雪が多かったためであると知らされ、私自身

の始末のつかぬ煩悩妄念の中に浮ぶ念仏も、先生方のお念仏もちっとも変らない、全くひとつだったなあ！と自然にうなづいたことである。度々引用して申訳けないが、浅原才市翁の一句

あなたのこころが　わたしのこころ
わたしのこころが　あなたのこころ
わたしがあなたになるのじゃないが
あなたがわたしになるこころ

は、心にくいまでにその消息を云い当てられているのに驚く。両聖のご信心をはじめとし先生方の信境に、わたしが努力精進して到達したというのでは全くない、徹頭徹尾よき人の心が私の業報のすみずみまで入り満ちて下さる、そこに自然に、私も仰言る通りですと一味にとかされているのを驚喜させられるばかりである。この点が前述の鉄舟居士や、道元禅師の悟道と趣きを異にしていることを知って頂きたい。居士や禅師は飽くまでも、自策自励して師の心境と一味になっていられるが、それとあべこべで「わたしがあなたになるのじゃないが、あなたがわたしになるこころ」如来の願力の自然の催しにあずかるばかりである。

嗄、このことは何という喜びであろうか、師と共に同じ信の橋に立たせていただくとは！そこには釈迦・弥陀二尊をはじめ、三国の七高僧方、聖人を中心とされたよき人々が無数にまします、その信心海は尽未来際かけて不滅の光明に荘厳せられている。このよろこびを

こころもよ、言葉も遠くおよばねば
はしなくみ名をとなえこそすれ

との良寛師の一首をお借りしょう。

四十六年十月二十三日　稿了。

ことばのあるなし

類人猿の色の記憶力は三秒位とのこと。人間がそれを長く保ち得るのは、色彩をことばにかえて記憶するからであるとのことである。

仏の大慈大悲のこころが、南無阿弥陀仏の御名となってあらわれて下さることによって、信の相続と不退の強いきずなとなって下さるのである。今更に仏の善巧のすばらしさに驚かされた。「仏は名をもって衆生（もの）を摂したもう」との深い思召しに謝すばかりである。

聚墨記

あとがき

不順な中にも早く冬が訪れて、店頭に暖房器具が飾り立てられました。さて今月は京都の池山師の年一回の一道会でありますが、皆様にご案内を申しながら私自身が病気のため出席が出来なくなり、病床からおわび申上げております。然しどうか御休心下さい、これは年中一度位やらねばなりませぬもので、やがて恢復いたしますことですから。

先月も近角先生と池山先生の旧著から御信味を頂きましたが、今月も同様な編集をさせて頂きました。自信のまんまが自然に教人信と薫っていられることは、驚くばかりでありますと共に、私自身の上に皆流れ込んで下さる法味であります。

福島先生の「晩年の祖師聖人」のお原稿は、先生がすでに八十二を数えられて、障り多い中をお念仏一つでおすごし下さった上からの老聖人の渇仰、ただありがたいことであります。先日、故窪田空穂氏の歌で「老いぬればこころのどかにあり得んと思ひたりけりあやまりなりき」の一首を読み「生死の苦海ほとりなし」の和讃も思い合せ、御晩年の聖人を偲びました。

木村さんの念仏詩抄ありがたく頂きました。源通寺の禿顕誠和上を偲ばれ「今死ぬる。今墮つる。今のおたすけ。今の後生。今のおおせ。今頓死。今急死。今のよび声。今の出立」の和上のことばを只今木村さんから送って貰いました。木村さんの心を打ちお念仏と流れるひとこまでしょう。

さて、師弟一味続は、ごたごたした文面になりましたが京都の一道会に出て池山先生の御霊前で申し上げるようなつもりで書きました。師弟一味の富士の山は、分けのぼる道はいろ〳〵ありましょうが、のぼる力のない私共に、如来の衆生化して下さることのありがたさを述べました。

「鷲の山高根にのみと思ひしにわが立つ杣（そま）にありあけの月」と高僧は詠じていられ、また、易行院法海師の歌に「明らけきひかりを四方（よも）の限りにて月のうちなる武蔵野の原」とも「武蔵野のチリチリ草の露だにも身を細めてぞ月は入りぬる」と讃じ、西行法師は「人も見ぬよしなき山の末だにも澄むらん月の影をこそおもへ」と随喜なされています。衆生化して下さる如来の本願のまことに、自然に如来化させて頂くこと不思議の一語につきますことであります。

御案内

○ 毎月第一、二、三日曜午后一時半。南区駈上町二の八八、一道会館、一道会例会。
市電、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目左入ル。

○ 毎月二十四日、午前午后。昭和区小桜町、教西寺法話会。
市電、御器所通り下車。市バス北山下車。

定価　半年　四〇〇円（送共）
　　一年　八〇〇円（送共）
編集・発行人　名古屋市南区駈上町二ノ八八　花田正夫
　　電話八二一局七〇三七番
印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　吉野穂志郎
発行所　名古屋市南区駈上町二ノ八八　慈光社
　　振替口座名古屋一〇四七〇番
　　郵便番号四五七

慈光第二十三巻第十一号　昭和四十六年十一月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可